

## 【授業科目】病理検査学 I Laboratory Pathology I

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
小菅 優子	1年次後期	必修	2	30	講義	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する フィードバック方法	<p>授業概要／病理検査とは、疾患の確定診断を下すとともにその病変の広がりなどを確かめるために必要な形態学的検査である。疾患の診断および治療を目的に、生検、手術などで採取された臓器、組織、細胞などの検体を扱い、これらの検体を適切な処理をするとともに標本を作製するものである。本科目では、病理学で学んだ知識を基に、診断に至るに必要な幅広い知識の修得も必要とする。また、臓器・組織別の取扱い法、迅速検査の意義、組織標本および細胞診標本の観察および評価法、分子病理組織検査法などについて教授する。</p> <p>*実務経験を持つ教員が授業を進める。</p> <p>課題に対するフィードバック方法／課題を提出した場合は、提出されたレポートにコメントを付けて返却する。</p>							
授業の 位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	<p>① 各系統別に関連する疾患の病理学的概要が理解できる。</p> <p>② 臓器・組織別の取扱い法、迅速検査および遺伝子検査の意義が理解できる。</p> <p>③ 組織標本の作製法について理解できる。</p> <p>④ 組織標本の観察法・評価法、分子病理組織検査法などの内容が理解できる。</p>							
時間外学習に必要な 学修内容および 学習上の助言	<p>第1～15回事前学修：指定の教科書を事前に読み、解らない用語について調べておくこと（各120分）。</p> <p>第1～15回事後学修：各回での学びを復習することで確認し、解らなかつたことは調べ教員に質問する（各120分）。</p> <p>*その他に、講義で学んだことを振り返るための課題を課すことがある（各120分）。</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	<p>第1回 病理組織学的検査法の意義、概要</p> <p>第2回 組織標本作製の手順、切り出し</p> <p>第3回 固定法</p> <p>第4回 脱灰法、包埋法</p> <p>第5回 薄切法、凍結切片標本作製法</p> <p>第6回 染色法理論</p> <p>第7回 一般染色</p> <p>第8回 特殊染色：結合組織の染色</p> <p>第9回 特殊染色：脂質の染色</p> <p>第10回 特殊染色：糖原の染色</p> <p>第11回 特殊染色：酸性粘液多糖類の染色</p> <p>第12回 特殊染色：核酸の染色</p> <p>第13回 特殊染色：組織内無機物の染色</p> <p>第14回 特殊染色：組織内病原体の染色</p> <p>第15回 特殊染色：生体内色素の染色</p>							全て 小菅
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。</p> <p>講義ごとのレポート（講義内小テスト）30%、定期試験70%</p>							
教科書	『最新臨床検査学講座 病理学・病理検査学』 医歯薬出版株式会社 (1年前期「病理学」で使用したもの)			参考書 等	『染色法のすべて』医歯薬出版株式会社			
学生への メッセージ	<p>本科目を理解するために、解剖組織学や病理学の基礎的な内容について十分復習しておくこと。</p> <p>積極的に講義に取り組んでください。</p>							